

久米島における祭地とその由来

田上 善夫

Festival Places and their Derivation in Kumejima, Ryukyu Islands

Yoshio TAGAMI

E-mail: tagami@edu.u-toyama.ac.jp

Abstract

The utaki and its festival in Kumejima have original characteristics. In later times, the elements which had not been in Kumejima were introduced, and they were transformed. Through the examination of the current utaki and the old documents of Kumejima, following remarks are concluded as for the origin of utaki: 1. Utaki is based on the blood relationships called Makiyo or the settlement society called Mura or Shima. New utaki was established with the movement of a settlement and from there the former place was worshiped. Utaki has the meaning of Otoshi, and is thought of as the site where man is tied to god. 2. Forest god, fire god, well god, rain god, marine god and so on are enshrined in utaki. Basically, natures are enshrined, and utaki did not relate to ancestor's soul or ancestor worship. 3. In Kumejima, each clan had a female god (priest) called Kaminchu. All Kaminchu were organized under Ryukyu dynasty, and among them, Kimihae was concerned with the ruling of the feudal lord called Aji. Utaki is thought to have been founded by an original female god, before Kimihae-Noro organization. 4. Major festivals are carried out mainly in Kimihae house and Noro houses around. However, utaki does not connect with such major festivals, but with small festivals which were founded before the control of Ryukyu dynasty. 5. Gods are enshrined in utaki, and Kaminchues circulate among them. To pray for rain, they visit utaki or sacred big stones, especially in the west end of the island, where marine god is enshrined. Utaki is placed in a settlement, worships gods of nature, is related to female gods before the religious organization, is not strongly tied with later festivals, and is made a pilgrimage to. The festival sites such as utaki has original characteristics basically. They are deeply concerned with nature, and act as an agent to mediate between man and nature.

キーワード：久米島，御嶽，火の神，君南風，稲大祭

keywords：Kumejima, Utaki, Hinukan, Kimihae, Umachi

I はじめに

各地の社寺などに神仏が祀られ，周辺の氏子や檀家また崇敬者などが集まり，司祭者により祭祀が斎行される。また堂宇等の施設がなくても，山や海，湖，滝や岩，日や月等々が信仰の対象とされ，祭祀が行われることがある。それらの由来は由緒書などに伝えられるが，本来の意味は必ずしも明らかでなく，またそれらはすでに失なわれたり，後世の作であることも多い。

神仏が祀られる地，また祭祀がおこなわれる地を「祭地」とすると，それはいわゆる聖地，霊地，ないしはパワースポットなどと同様に，周辺とは相異なる地として認知される地である。一つには岩や水，

樹木などの自然が，周囲の景観とは異なっている。同時にそうした地は，祭祀や墳墓の遺跡にあたることも多い。また必ずしもそうした地でなくても，かつての集落や住居址などがみられる。いずれにせよ自然の景観に由来するとともに，そうした地に人々の活動が加わることにより，不特定の想念が生みだされたことが，祭地につながったと考えられる。このことは祭地を多様なものとしたため，その由来の多くは後世には不明なものとなった。

こうした祭地の基層的な特色は，さらに仏教や儒教などの招来とともに変容する。ただし，地域的には固有の特色が残るところもある。たとえば沖繩に残る固有の祭地は，総称として御嶽ウタキとよばれる。

沖繩では，女性司祭が社会制度として存続し，ま

た神アサギや腰当て、お通しなどがのこる。土地の霊力や地平からの霊力を憑依し、あるいは自らの霊力を更新して、生活世界を更新しようと、年中祭祀や儀礼が行われる。すなわち、カミを表象しながら、集団で祭祀行為が行われる(伊従 勉, 2005)。こうした琉球-沖縄での、神、施設、司祭、祭祀等々は、時代により大きく変容してきたが、固有の特色を伝えていて、祭地の由来を示すと考えられる。とくに現在まで伝えられている有形の信仰施設は、祭地の観念の表象として重要な対象となる。

もともと場所には、イメージ、アイデンティティ、歴史意識などの、人間の諸感覚が埋め込まれ、かつ創出される。それらは地域住民の民族、階級、年齢、ジェンダーなどからもたらされ、変化する。中国との交易により暦や風水^{フンシュ}が入り、明治初頭には御嶽での国家祭祀が廃された。久米島の山城では、史跡整備委員会により1992年から拝所、神屋、伝統文化が掘り起され、御嶽には新たに鳥居や賽銭箱が設置された(河合洋尚, 2004)。島嶼での人々の移動は大きく、沖縄県内、全国、さらに海外移住者との大きな交流がある。明治以降にも集落は次々と変わり、古い建物は無いという。また昔は馬がたくさんいたといわれ、生活の変化も大きい。とくに新たな神々が入り、祭祀施設が作りかえられている。

久米島儀間のア-ラ(アラサキノマキヨ)の御嶽には、屋敷跡に三ツ石と香炉が置かれ、またア-ラ岳の通し、遥拝所となる。2002年にア-ラの御嶽整備の話が老人会でまとまり、神屋が建立されたが、伝統の再活性化と創造であり、伝統的祭祀組織に代わり、御嶽を村落の管理下にあるものとした(深山直子, 2004)。多くの御嶽は、樹や森に囲まれ、神庭の奥に神石が並べられ、建物は無い。近年の整備では、新たに祠堂などが作られることが多い。こうした変化は、単に祭祀施設の変化のみならず、その内容においての変化も示している。

沖縄本島では固有の信仰が、琉球王府での統制を経た後、明治期の琉球処分により大きく変わった。しかし沖縄本島西方の久米島では、神女組織など、伝統的な信仰がなお伝えられてきた。久米島での、近年の一部の祭地における変化は、琉球から沖縄となった明治期の変化よりも大きく、そのため固有の信仰の姿を残す伝統的な祭地は重要である。

ここでは御嶽をはじめとする信仰施設や、神女が聖地を廻る祭祀などから、祭地のもつ基層、古層の

意味を明らかにすることを試みる。そのため、とくに祭地とかかわる可能性のある、自然の特色について、概観する。次に久米島の各地域の祭地の特色について、明らかにする。さらに、それらにもとづいて、久米島の祭地の由来について分析する。

II 久米島の概観

1) 自然と影響

山地と河川

久米島は沖縄本島の西方約100kmにあり、総面積63.21km²、人口8,427人(久米島町役場, 2014年7月)である(図1)。島の北部の山地は安山岩質で、500万年前の火山活動により形成され、大岳(230.8m)、タコウ山(326m)、宇江城岳(309.5m)などがそびえる。南部の山地も安山岩質で、2000万年前の火山活動で形成され、阿良岳(287m)、中ムイ(216.9m)、大西山(151.4m)などが連なる(山里 清, 1982)。

北部の山地には、直径2km余のカルデラ状の凹地があり、湖沼が形成されている。そこから白瀬川が南流し、島の南西部の兼城付近では、山麓台地を数十mほど浸食している。ほかにも島の南西側には儀間川があるが、規模は小さい。

平野と海岸

南北の山地の間に、仲里中央平野と儀間平野がある。西部台地は礁性石灰岩の段丘から成り、ドリ-ネやウバーレがある。東の奥武島と奥端島の先に、ウガンビシ^{ウガンビシ}が伸び、11km先のウガン崎に至る。堡礁で囲まれた礁湖の中に、離礁群がある。久米島の周囲を、裾礁がとりまく(山里 清, 1982)。

島の北側は傾斜が大きく、南西側は沖合1kmまでリーフとなり、東側は島の径とほぼ同じ距離まで礁湖が続いている。方位による海岸地形の違いは、強風時などに大きな影響をおよぼす。

久米島は、先島諸島を除けば、沖縄本島に次いで面積の広い島である。同様に人口でも先島諸島を除いて、沖縄本島に次いで多い。他の諸島と同様に沖縄トラフの東にあり、山が島の中心を占める。山麓から海岸にかけて、緩傾斜の台地が続く、そこに耕地が広がる。

植生と樹木

久米島には、亜熱帯性の森林が発達する。優先する植生は、山地にはリュウキュウチク群落、スダシ

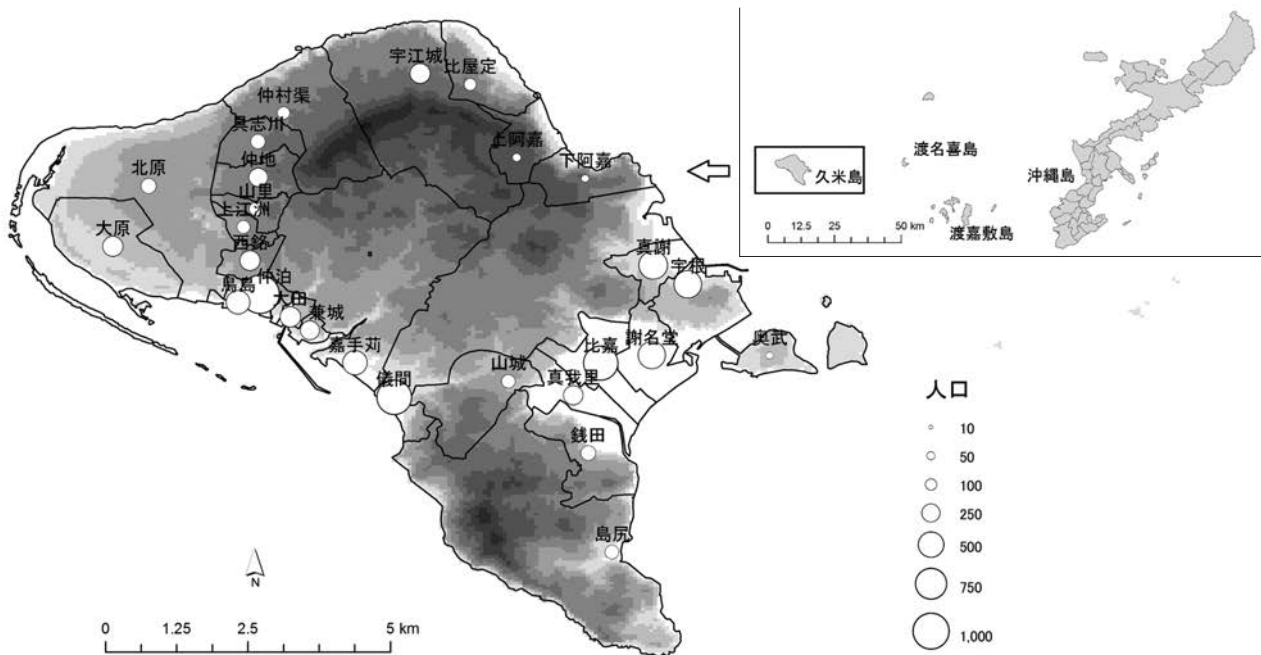


図1 久米島の位置と字別人口

久米島の字名を示す。人口は、2005年国勢調査による。全島を、仲地周辺の西部、宇江城周辺の北部、真謝から東の東部、比嘉周辺の南東部、島尻の南部、嘉手苺周辺の南東部に分けて記す。

イ群落、リュウキュウマツ群落があり、潮風の強い地にはピロウ群落、石灰岩地帯にオオバギ・クロツグ群落があり、低平地にはイソフサギ群落、イソマツ群落、ミズガンピ群落、コウライシバ群落がある(山里 清, 1982)。

喬木として、マツ科の針葉樹のリュウキュウマツが、山地斜面や段丘崖などを中心にみられる。また南西部の海岸付近にも、樹林帯が続いている。とくに西部台地の久間地にある、五枝の松とよばれ1839年に植えられたという巨木も、リュウキュウマツである。

天候と生活

久米島では四季の天候は、地方名でよばれるものがある。1月中・下旬、旧十二月八日の鬼餅ころの寒さを鬼餅寒さ、3月中・下旬の東シナ海を発達しながら東進する低気圧にともなう強風を二月風廻り、4月上旬から5月上旬の温暖な春の日を陽春、5月8日頃から6月23日頃の梅雨を小満・芒種、6月下旬から7月中旬の梅雨前線の北上にともなう強い南風を夏至南風、10月上旬の北東季節風の吹き出しを新北風、10月末から11月上旬の移動性高気圧に覆われた暑い日を十月夏小、12月下旬の寒波を冬至寒さという(沖縄気象台久米島測候所, 2004)。

天候の地方名は、寒さに関する表現が多い。1981-2010年の平均では、1月平均気温は那覇の

17.0℃に対して久米島では16.7℃とやや低めである。さらに最低気温の記録は、那覇の6.3℃に対し、久米島では2.9℃と著しく低い。久米島は那覇よりも大陸寄りに位置することから、寒気の影響が強いことが考えられる。

また天候の地方名には、風の表現も多い。月平均風速は久米島では5月が最小で3.4m/s、11月が最大で4.0m/sである。那覇でも最小月、最大月は同じであるが、それぞれ5.0m/s、5.5m/sである。季節による風速の変化は小さく、その値も久米島では那覇にくらべて小さいが、山体が影響していることが考えられる。

南風とのかかわり

西南日本では、梅雨の前後に特有の天候をもたらす南風を、黒南風、荒南風、白南風、のように呼んでいる。久米島ではその最高神女は、君南風とよばれる。君南風の名の由来は明らかでないが、南風にかかわることが考えられる。

全国の気象官署(地方気象台・測候所)、144地点について、月別最多風向に関して集計する。南風として、最多風向が南寄り、すなわち東南東から西南西となる月数を集計する。南風が卓越するのは日本列島付近では、夏季を中心とした暖候期である。また全国的に南風が卓越している。

ただし寒候期、9月から4月について、南風の出

現する月数を示すと(図2)、南風が卓越するのは、日本海側である。さらに先島諸島では南風は少なくなる。10月から2月に限れば、南西諸島で南風が卓越する地点はみられない。

このことは南西諸島では、南風の出現がきわめて少なく、それも暖候期に集中する風であることを示している。久米島の場合には、南風が卓越するのは、6、7、8月の3ヶ月に限られている。これは稲作の時期でもあり、とくに南風は梅雨の天候、さらに降水をもたらすものとして、捉えられたことが考えられる。

ここで、琉球から、鹿児島、福建、ジャワ・シヤムへの往復航海の記録がある。鹿児島へは6・7月に行き、11・12月、4~7月に戻る。福建へは10月中旬から12月下旬に出、6月下旬から7月中旬に戻る。シヤムへは8月下旬から11月下旬に出、4月中旬から5月下旬に戻る(石島 英, 1989)。

方面ごとに出航時期、帰港時期が異なるが、北上する航海は春から夏、南下する航海は秋から冬である。これはこの地域の卓越風向の季節変化に対応している。すなわち、北上は初夏の季節風の頃、南下は初冬の季節風の頃を中心としている。

鹿児島への薩南諸島伝いの航海にくらべ、福建やさらにジャワ・シヤムへの航海は困難であるが、その交易品を伴う帰港をもたらすものとして、南風が捉えられたことが考えられる。

2) 風の影響の地域性

風上側と風下側

久米島空港の年間の風向頻度は、北から北東が多く、南南西から北北西は少ない。冬と春は北、梅雨と夏は南東から南南西、秋は北東が多い。21kt/h以上の風は11月から3月に多く、31kt/h以上の風は9月が多い。10分以内の風向の大きな変動は、北東から東のときに多い(慶世村清記, 末吉秀樹, 比嘉哲也, 山口直輝, 西 栄次郎, 外間宏信, 2004)。前述のように夏季の南風は、特別の意味をもつ。さらに、年間では東寄りの風が多く、冬季には北寄り、

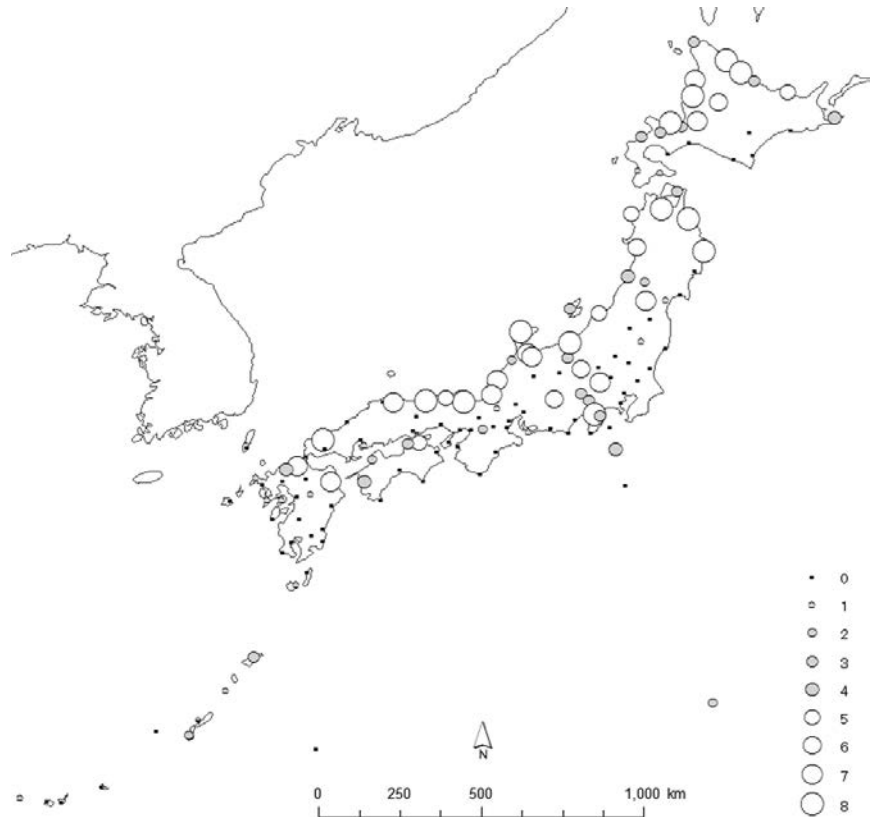


図2 寒候期における南風の卓越

全国の気象官署について、9月から4月に南風が卓越する月数を示す。

夏季には南寄りとなる。そのため島の東部は風上側に、西部は風下側になることが多く、また島を北回りあるいは南回りする気流が考えられる。

久米島では東側の久米島測候所(久米島町役場, 仲里)と、西側の北原(久米島空港, 滑走路中央)で観測が行われている。両地点の風速を比べると、風向が北北西から北北東、また南から南西では、空港出張所が1.5~1.8倍となる。反対に、東から南東では、測候所の方が強い(比嘉正弘, 松田博之, 山城幸浩, 1989)。この風の差異は、山体の影響とみられる。すなわち、島の中央にある山地の風上側になるときに風が強く、風下では弱くなることを示している。

また、久米島空港滑走路の、1200m離れた北端と南端での観測では、ともに東寄りの風の時に、風速の幅が大きい。9月から1月の風向の出現は、南端では70°に小ピークがあるが、北側では逆に少ない(大城武雄, 宮城邦昌, 玉城 章, 1992)。すなわち、山地の風下側になるときには風が変動する。また海岸線に沿う方向に、風が吹きやすいことを示している。

さらに、空港の北東1 kmにある久米島灯台では、

風向は北北東から東北東が多く、風速は空港の方が大きい(西 栄次郎, 仲間則智, 我那覇勝久, 城間恒彦, 2006)。このことも、風向が海岸線の走向に強く影響を受けることを示している。

このように久米島では、風は地域により異なる。ただし久米島の最高地点の標高は326mであり、地形性上昇などによる降水分布への影響は小さく、風の地域的差異は、必ずしも影響をおよぼさないことも考えられる。

強風の影響

久米島へは、台風が年平均3.6個接近する。沖縄付近では台風が遅く、最盛期のため、被害が大きい。1961年から2001年に、最大瞬間風速50m/s以上の台風は、9回襲来し、9月が最多で7月が次いだ。1968年の第3宮古島台風では、最大瞬間風速62.4m/s、最大風速43.7m/sに達した(沖縄気象台久米島測候所, 2004)。

久米島では台風は最大の自然災害であり、島の伝統的な建築様式の民家は屋根が低く、石垣を巡らして、強風を避けている。台風が北上するときに久米島の東方を通過するか、西方を通過するかで、強風の方向は異なる。西方を北上するときには南西風となるが、このときには台風の進行速度が加わるためとくに強風となり、そのため島の南西側で強風の直撃を受けやすいことが考えられる。

台風以外にも、竜巻により強風が発生する。2006年11月26日には、20時40分頃に降雹があり、50分頃に北原で19m/sの突風を観測した。このとき寒冷前線前面の南西風下で、強い対流不安定状態があり、スーパーセルに伴って、降雹とダウンバーストが発生した。翌27日02時頃にも、北原で20m/sの突風を観測したが、暖域の線状降水域に発生したガストフロントによると推定される(永山武彦, 上原政博, 大城智幸, 仲間 豊, 栽 吉信, 2008)。こうしたスーパーセルやガストフロントは、前線付近に存在する擾乱にもとづいているが、突風に移動速度が加わり風速が増大する。これらは東進しているため、島の西側に発生が多いと考えられる。ただし、風速からも継続時間からも、台風にくらべ影響は小さいと考えられる。

樹木の偏形と災害

さらに風は、島の景観に影響を与えている。久米島全域のモクマオウの偏形からは、南東風が示される。北東風はわずかに宇江城、比屋定、上阿嘉に示

されるが、そこにはリュウキュウマツの防風林がある。また1982年の台風11号のときのサトウキビの倒伏は、山麓、斜面や微高地などで大きかった。また塩風により火風災害がもたらされるが、北岸で被害が大きく、高度300mにも達する。南部ではリーフが広がり、砕波は1km沖合となる(長谷川 均, 1984)。

樹木を変形させるような南東風は、夏季の卓越風向であるが、その風下地域のみが南東風の影響がみられない。そこに防風林がみられることは、防風が卓越風に対してではなく、島の風上側となるときの、海から直接吹き込む風への対策を示すと考えられる。すなわち、強風災害のみならず、潮風害の影響が大きいことを示している。一方南西側の海岸ではリーフが発達しているため、潮風害が軽減し、内陸の山麓部も、潮風害を避ける位置にあたる。

防災祈願は、祭祀の中でも主要なものの一つであるが、島の南西側での強風に対して、北東側では塩分の被害が加わることにより、風が災害として大きな意味をもつことになると考えられる。

3) 集落の変化と影響

ムラの移動

続日本紀の和銅七(714)年にある「球美等の島人」とは、久米島をさすといわれる。1264年には、久米島から琉球に入貢するようになる。1430年頃から久米島に按司が割拠してグスクを建てるが、1510年に討伐される。慶長十四(1609)年に、島津の支配下となる(仲原善秀, 1982)。

久米島ではムラはマキヨとよばれ、小さな血縁集団であった。ヲヒヤはその中の旧家である。久米島では、仲地や西銘など山裾の泉に近い、肥えて穏やかな地に定着したが、長い年月をかけて、儀間、真謝、泊、謝名堂や、比嘉、島尻、宇根など、低地におりた(仲原善秀, 1982)。

島尻の兼久村は、1648年にクサト原とスハラ原から移動したといわれる。同様に現在の真謝はフサキナ山の山間部から、宇根は登武那覇城の中腹から、比嘉も背後の丘陵の谷間から移ったという。

集落の低地への移動は、港に近づくことになる。琉球王府から先島への経路として、また24回行われた冊封使の寄港地として、久米島の港は重要であった。君南風が首里へ行くには、真謝港から出たという。集落が下降したことは、祭地に影響するとともに、港からの外来文化との接触は、久米島の固有文化に影響したことが考えられる。

農地開発

泉水を堰き止めて造った迫田は、アール、宇江城岳南麓、仲地・西銘付近に多かった。具志川では1664年のイジハカ池、仲里では1727年のフンジョー池をはじめ、1770年代までに30近くの溜池が造られた。1759年頃から溝を造って湿沼地の排水工事が始められた(仲原善秀, 1982)。

久米島で最も古い集落といわれる西部山麓付近には、具志川村の字の半数がつらなり、祭祀施設も集中している。この西側山麓の気候や水に恵まれた地からさらに、17・18世紀には水田や人工林が造成されて、開発が急速に進んだ。琉球国由来記にはこの地域の御嶽が多く記載されるが、同書の成立は、こうした開発が進められた頃にあたる。そのため、久米島に固有の祭祀や文化を記録するとともに、変化の影響を受けた可能性がある。

先述のように17世紀頃から、集落は海岸付近に降下するが、低平地でも農業生産が進む。オニヒトデが、サトウキビ栽培などで肥料とされていたが、多くの労力を要することから近年には採取されなくなり、1973年には大量発生して、サンゴ礁に大被害がおよんだ。1960年代前後の高度経済成長、また1972年の沖縄の本土復帰、の頃の社会の大きな変化の一端を示しており、祭地にも有形無形の影響があったことが考えられる。

4) 固有祭祀と外来文化

グスクと御嶽

現在も祭祀が行われ、かつ規模の大きな建築物としてグスクがある。グスクは三山統一の1429年頃から、久米島の按司により造られ、伊敷索城^{チナハ}では、ハマ石という珊瑚石灰岩が野面積みされる(中村昌尚, 1982)。グスクは、按司の居城、防御集落などの説があるが、久米島では聖域である御嶽ともみられている。一方グスクは祖先信仰として、御嶽とは区別されている(仲原善秀, 1982)。

久米島では、壮大なグスクとは異なり、御嶽は小規模で、目立たぬ位置にある。

海の神、天の神と御嶽

久米島では、海の彼方のニライ・カナイ、天上のオボツ・カグラから、神々が現れる。火の神は、ノロを通して神々と人々をつなぎ、竈に似せた三つ石を印とした。神は少ないが、雨の司コウジャ^{ヒヌカシ}主^ヌ、コウジャー^ヌ前^ヌがある。神の鎮座する高クバやマーニの生えた御嶽、ウガミ、ウグワンジュがあり、また大

きな黒石はクルマン、マンシーとよばれる。死後に神として祀られると、威部カナシ、とよばれる(仲原善秀, 1982)。

久米島でも、基本的に琉球の神観念が伝えられている。御嶽はウタキというよりも、ウガミあるいはウカミ、とよばれていたといわれ、祭地であることがうかがわれる。

神女と王府の影響

久米島では、固有の祭祀やそれを行う施設も少ないといわれる上に、琉球王府の統制が影響を及ぼして、変化してきた。変化は祭祀を司る神女^{カミシメ}にもおよぶ。

具志川城にはカナシ君、宇江城にはヨヨセ君、チナハ城にはセノ君の神女が控えていたという。またコイシノは、中城の神女で航海や造船の神とされ、さらにオモイ君がいたという。

君南風の名は1500年頃には記され、久米島では君南風を最高に、10名のノロや神女が組織化された。ただし、ユタはいなかった。1573年頃には久米法印が真言宗をおさめ、観音をもたらした(仲原善秀, 1982)。

久米島では、小さな血縁集団の祭祀組織とは別に、グスクの按司による神女が生まれ、さらに琉球王府により神女組織が統制された。この間の御嶽の変化は明らかではないが、何らかの影響があったものと考えられる。

外来文化の影響

同じ頃の、堂のヒヤ(1450-1510)の作として「天気予想一班」が伝わる。4月×4日×4時を組み合わせて、降雨後の天気を、半雨、大雨、風、晴と予想する。なお指南広義の風信考の、東アジアの気象概略は、程順則^{ウチダイシ}が1703年に記している。太陽石での御日より拝み日記では、冬至頃の日の出の場所から、雨風を予想する。1618年の元和航海記が母胎と考えられる(仲原善忠, 1969a)。

「天気予想一班」は、4種の組み合わせを原理としており、観念的な性格のものである。記録にあるような堂のヒヤの作ではないとされるが、16世紀頃より琉球王府の統制が進められており、この頃の外来の文化の影響の一端を示すと考えられる。

III 御嶽と祭祀施設

1) 西部

大岳の西麓、標高100m付近に、集落がつらなる

(図3)。高位段丘を西流する河川により谷が刻まれる。その北部は安山岩類、南部は凝灰岩類の岩石で覆われている。西方の海岸付近の北原や大原には、中位段丘面が広がる。この範囲には、琉球石灰岩が露出している。

島の西側から南側にかけて、沖合に細い干瀬がとりまいている。干瀬と海岸との間は、北側では完新世のサンゴ礁面であり、久米島空港の滑走路がつくられている。南側は海面下となり、サンゴ礁原、イノー：礁池、が広がる(図4)。

集落と祭地

西麓では南から西銘、上江洲、山里、仲地の集落が続く。そこにはさまざまな種類の祭地があるが、西銘を例にすると以下がみられる。

上江洲御嶽は、アラカキの柱ともいわれ、新垣村のコシアテで、神の柱である。そこには多くのクバが茂り、ガジュマルの樹の下に、神石が組まれている。

この上江洲御嶽のやや下方に、西銘ヌン殿内がある。西銘、上江洲、久間地の祭祀をする西銘ノロの、火の神を祀る。

その付近に、新蔵下がある。蔵下とは、^{ミンクワッチャ}公庫である。また、新垣ヲヒヤ家、上江洲家(石垣殿内)がある。上江洲家では、屋敷内の一面にクバが植え

られ、御嶽のような景観を呈している。

また雍正十一(1733)年に作られたとされる、泰山石敢當がある。除災招福が祈願されるが、泰山の名は、中国の影響を示している。

さらに下方の西側には、^{チナバク}拝所釣縄箱がある。木で囲まれた広場に祠がたてられ、釣縄箱明神、一九五七年と記される。祠内には、神石が二つ安置される(図5)。

集落には御嶽があり、その前にノロがいて、さらにその前にヒヤーの家があり、火の神、三ツ石が祀られる。この御嶽、ノロ、ヒヤの基本的な要素のほかにも、上記のように蔵下、石敢當、明神などがみられる。ただし蔵下とは稲作に結びつき、石敢當や明神も外来のものであるから、後世の付加あるいは習合によるものであり、固有の祭祀施設とは異なると考えられる。

御嶽と御通し

山里と上江洲に隣接した西銘にある、^{フーグ}富祖古御嶽の御通しは、西銘東方の富祖古岳を遥拝する。クバの木の前に神石が組まれる。また玉那覇御嶽は山里にあり、木の前広場に、やや大きな神石が組まれている。

さらに仲地では、クグシク：小御嶽、が仲地東方の山の御嶽を遥拝する地である。マーレーや、^{ウフ}大御嶽も、遥拝する地である。マーラー御嶽も、遥拝

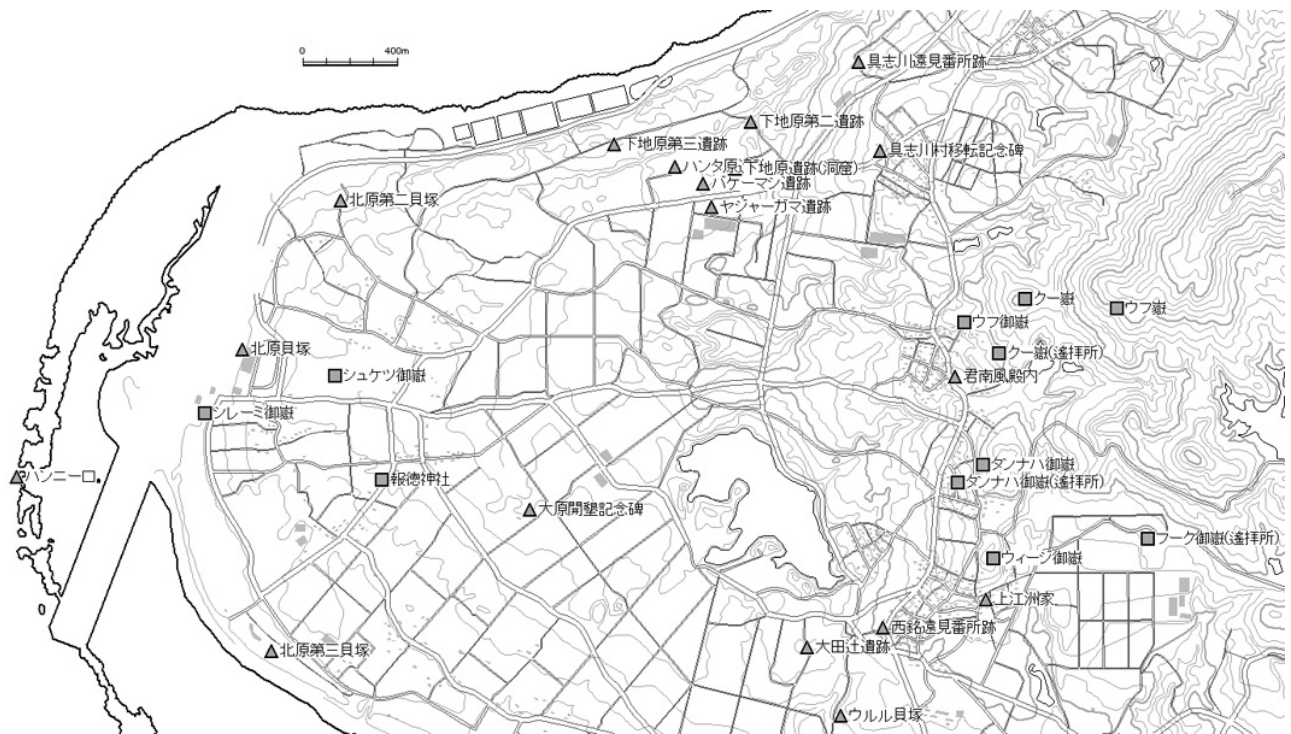


図4 西部の御嶽と遺跡

西銘、上江洲、山里、仲地、具志川、北原、大原について、御嶽(□)と遺跡(△)を示す。施設とその位置は、沖縄久米島調査委員会(1983)の調査にもとづく。図8、11、16、18、21も同様。

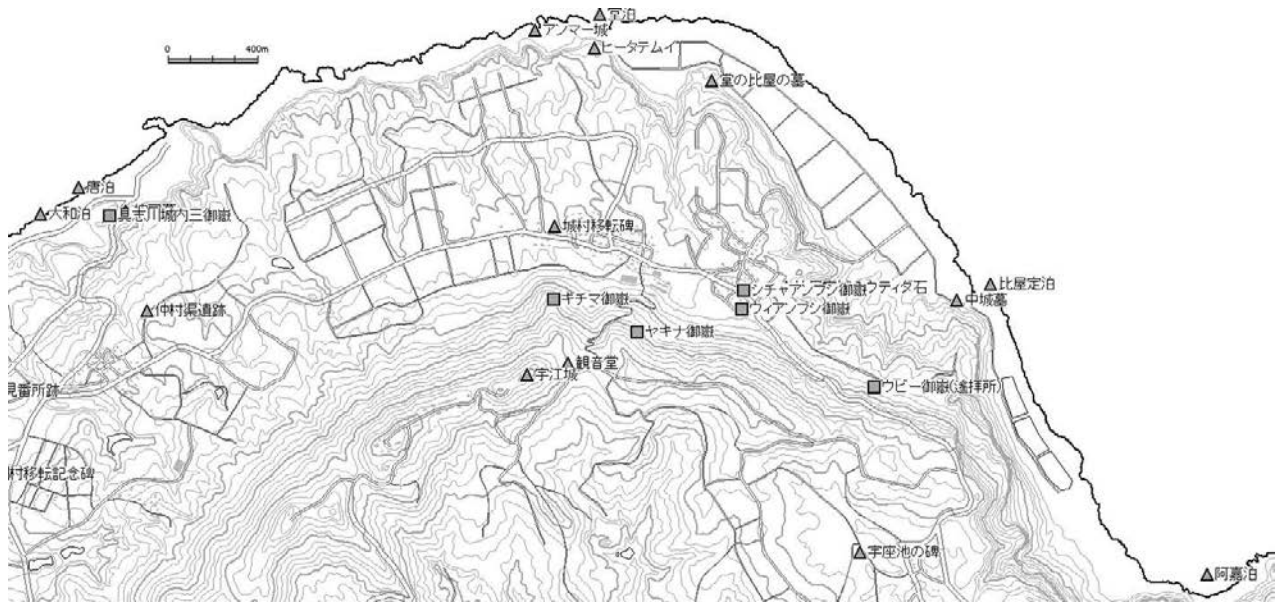


図8 北部の御嶽と遺跡

仲村渠、宇江城、上阿嘉、下阿嘉について、御嶽と遺跡を示す。

所である。また付近にはヤナハ御嶽、ヤナハ蔵下やダキルン：武富、御嶽がある。

君南風殿内

仲地には、久米島の神女組織の中心にある君南風の殿内がある。君南風殿内は、1937年に神社風に建て替えられ、1977年に新社殿が完成したという。現在は四間四方のコンクリート造りの建物である。殿内の石段の手前に、石灯籠が置かれる。さらに道路側に鳥居があるが、ペルーに行った人たちにより建てられたという。

君南風殿内では、中央に数個の神石が祀られている。その両脇は、祀られているわけではないという。毎朝6時にお水かえをする。線香もあげられる。6月には豊作を祈り、7月に感謝の祭をする。9月にもウマチーがある。君南風のヒサカキに神が降りてくる。御幣もあるが、後からのものという。君南風は、その下で前を向いて座る。

干ばつの時には、君南風は10名のノロを集め、君南風殿内で雨乞祈願をし、庭の大石に水をかけ、オモロを唱えた。その後ハンニー崎の御嶽で祈願し、ハンニー崎にある大石の上でワラを燃やす。夕方から君南風殿内前の道で綱を曳いた。綱曳きは、18世紀中頃から仲地と西銘で、行われるようになったという。

中国の影響

仲地の下方の久間地では、五枝の松といわれ、リュウキュウマツの枝が張り渡されている。五枝の松の傍らに、土帝君トーチーケンが祀られる。中国の土地の神で豊

作が祈願され、琉球王府の影響よりも後のものである。また同時に、弥勒仏とも刻まれている(図6)。大きな溜池の傍らの地であり、稲作にかかわりが深いとみられる。仲地にも、安里の土帝君が祀られる。

兼城のウフナカのイービ、神台では、独特の獅子舞いがあるという。年1回、旧八月十五日に祭がある。この日は中秋節であり、中国では春節に次ぐ重要な祭の日のため、その影響があるかもしれない。

海岸付近の祭地

琉球信仰にあるニライ・カナイでは、東あるいは辰巳の方角に異界があるが、西方にはそれに相当する意味はみられない。ただし、久米島の最西端にあたる地には、いくつかの祭地がある。

海岸付近の小丘の上に、シレーミ御嶽があり、三ツ石が置かれる。西銘・仲地などの山麓集落から、西流する川の最も下流部にあたる。その西の海側には、現在の久米島空港がある。

シュケツ御嶽は、畑の中に茂みがのこる。また、メートウダ石という、奇妙な形をした大岩の下に、香炉がおかれる(図7)。

2) 北部

北部の山麓付近には、幅の狭い高位段丘と段丘崖が続く。その下方の海岸付近には、完新世のサンゴ礁面と沖積層があり、農地となっている。

山麓の諸集落に沿い、高度100m付近に島を周回する道路がある。急崖となる比屋定バンタ付近では、高度200m付近を走っている(図8)。

久米島における祭地とその由来

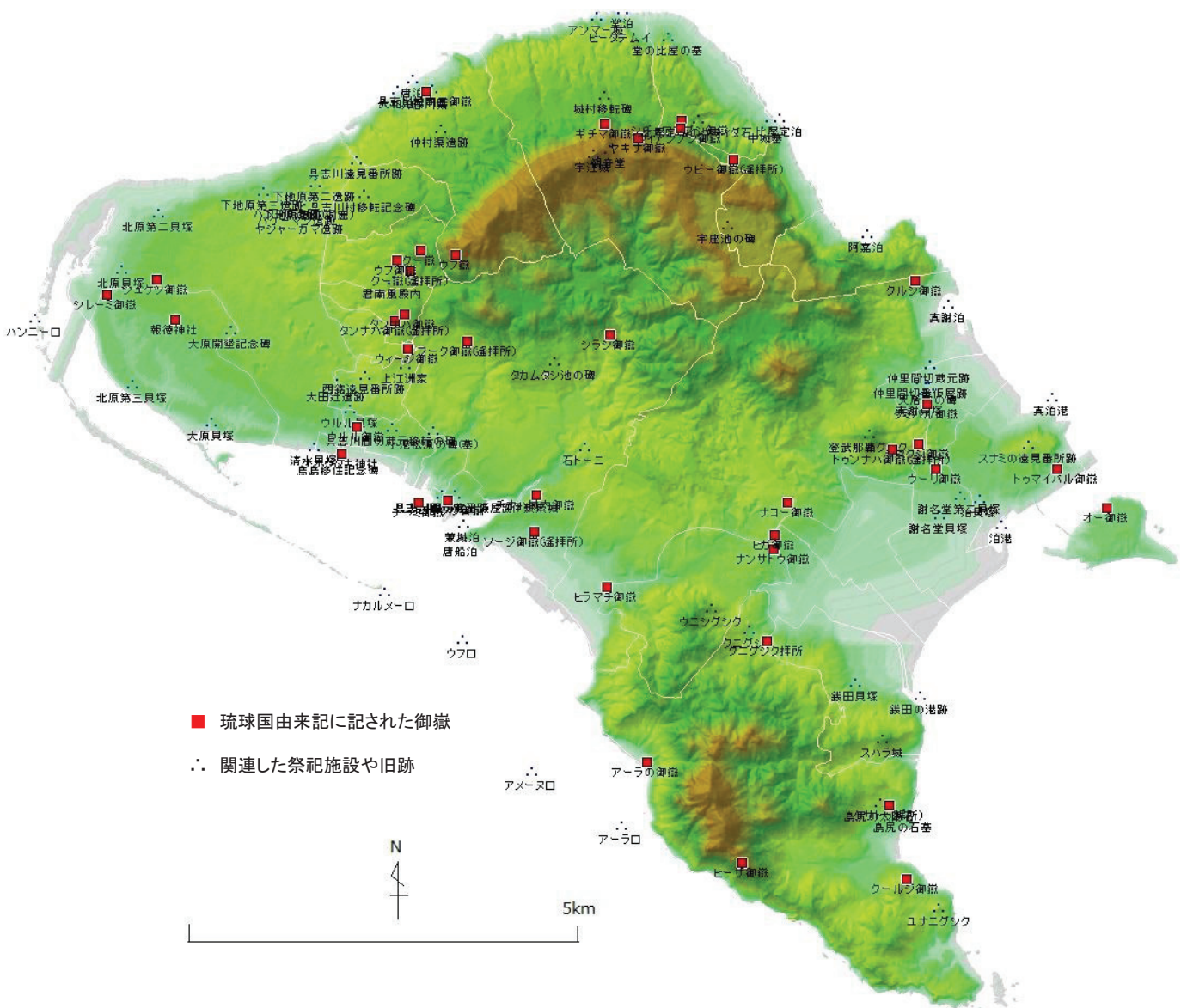


図3 久米島の地形と祭祀施設等の分布

久米島は中央に山地があり、その周囲に平地が広がる。また南部にもやや小さな山地がある。主要な集落は中央の山地を囲むように分布する。御嶽は山麓部に多く、関連した祭祀施設や旧跡は、海岸寄りに多く分布している。御嶽などの位置は、沖縄久米島調査委員会(1983)にもとづく。



図5 西銘の拝所チナバク

釣縄箱と記され、新しい堂である。付近にコシヤテ森、大ツカサ、若ツカサガナシをまつる、上江洲御嶽がある。また、西銘には富祖古御嶽の遙拝所のフークウタキがある。



図6 久間地のトーティーケン

土帝君と書かれ、道教の神をまつる。付近の山里の玉那覇御嶽は、アツミナコシヤテ森イツノイバガナシをまつる。仲地の君南風殿内では、君南風が祭祀をおこなう。



図7 北原のメートウンダ石

岩そのものが祀られる。北方の具志川城では、真玉森ソノヒヤク、サキマ森カナヒヤク、タツヒヤクをまつる。トートー石などで、君南風が祭祀をおこなう。



図9 宇江城のウィーグスク

城内に、大ナチャ御イベ、アフライサスカサ御イベ、ヲモヒキミ御イベ、イツミジュキ御イベ、アサカワ御イベ、テダ始め御イベを祀る。



図10 宇江城の観音堂

ウィーグスクの直下にある。御嶽ではないが、神庭のような広場にたつ。また宇江城の屋慶名御嶽は、キミヨシ御イベを祀る。



図12 真謝泊付近のクルシムイグスク

付近の崖上は森となる。黒石御嶽は、他の御嶽からはやや離れた位置にある。ヨヤマシ御イベを祀る。



図13 トウンナハノカンヌマー

真謝の背後にある登武那覇杜は、独立した小山となっている。御嶽には大ツカサ御イベをまつる。



図14 宇根ヌル殿内の境内

殿内の建物とは別に、石造の祠堂がある。御嶽とは様式が異なる。火の神をまつる。



図15 真謝の天后宮

航海の神をまつる。ブサードー：菩薩堂ともよばれる。奥武島では火の神が祀られるが、琉球国由来記にはない。



図17 謝名堂のナンジャジョー

南謝門では、祠堂の前で祭祀が行われる。琉球国由来記には、記されていない。現在は、鳥居が建てられている。



図19 島尻ヌル殿内

島尻の北東側にある。殿内の多くは集落内にあり民家の様式の建物であるが、この殿内の周囲は樹林となっている。



図20 儀間のアーラ神殿

儀間の集落から南東側の海岸にある。御嶽であるが、近年新たな建物が作られ、神殿とよばれる。



図22 儀間のヒラマチウタキ

儀間の集落の北東の端にあり、樹下に小さな石籠が安置される。平松御嶽と記されるが、マツではない。若ツカサ御イベをまつる。



図23 儀間ヌル殿内

広い敷地内に、民家風の建物がたつ。隣接する嘉手苺にはソージ：清水御嶽がある。兼城の兼城御嶽は、クロマンノイベ、カネマンノイベをまつる。



図24 チナハウタキ前のローカーヤー

嘉手苺にあり、祭祀の時にローカーヤーが建てられる。御嶽には久米ノ世ノ主御イベ、アフライサスカサ御イベ、トヨムスノキミ御イベをまつる。



図11 東部の御嶽と遺跡

真謝，宇根，奥武について，御嶽と遺跡を示す。

海岸の城と御嶽

仲村渠の海側の小丘に、具志川城がある。石が平積みにされ、琉球の城に特有の、曲線を基本とした石垣が造られる。城内は小区画に分けられ、小さな石囲いがある。旧六月ウマチーで、君南風は首里、城全体、唐を拜する。ヤマトは含まれない。

具志川城から北東方向に、ミーフガーを望む。海岸の岩に、縦に20mほどの大きな空隙が入る。具志川城のトートー石からは、ミーフガーが望める。この付近では海が荒く、白波が打ち寄せる。海岸には、クサトベラやミズガンピが茂る。

宇江城の下に屋慶名御嶽があり、2本の樹木の前に、神石が並べられ、広場が作られる。樹木の根元に、安山岩で幅1mほどの石組みが造られる。その前に大きな葉が置かれ、塩、米、線香が供えられる。なお御嶽には、花は供えられないという。

その東方に、ウィーアンブシと、シタアンブシの御嶽がある。アンブシは網干と記されるが、高所にあり、海からは遠く離れているため、網を干したのではなく、雨欲しで、雨乞い祈願といわれる。なお付近には、比屋定の太陽石がある。太陽石はほかに、島尻にも残る。

山頂の城と御嶽

宇江城集落の山側の宇江城岳の山頂部には、宇江城

がある。山頂直下の東側は、やや緩やかな丘陵状の地形となっている。旧火口部にあたるとみられ、ここからは南東部の島尻まで見通せる(図9)。

宇江城は、南西から北東に伸びる山頂の平坦部に位置する。石垣が築かれ、廓の中央に平たい石組みがある。グスクの中に、仲里城御嶽がある。14世紀末に、伊敷索按司は3人の息子を、宇江城、具志川城、登武那覇城に配したと伝わる。宇江城は、1510年に王府軍の火攻めで落城した。

宇江城の直下の高所に、観音堂が建てられている。

間口二間のコンクリート造りの堂には、千手観音が安置されていた。その前に香炉が5つ置かれている(図10)。近年、那覇からも廻りにくるようになったというが、三十三観音のような霊場ではない。

3) 東部

真謝付近は、まとまった海岸平野である。低地の内陸側に低い砂丘がのびる。背後にトンナハ山(136m)がそびえる。東には細い干瀬が、御神崎まで10kmにわたり続き、その南側にはイノー：礁湖が広がる。奥武島は最高点が15m、奥端島では最高点が7mのやや低平な島で、ほぼ砂丘であり、その下部には安山岩類がある。両島の先には、細長いハテの浜、海浜が続く(図11)。

北東部の海岸付近に、黒石御嶽がある。付近から石棺が出たという。琉球貿易のため、クシビーの火を焚き、渡名喜島に知らせる。海岸は磯で、砂浜は無く、灌木が茂る(図12)。久米島島内でも、北東部海岸と、島尻の南部海岸ではリーフが発達せず、海食崖となっている。黒石御嶽付近は、黒石森城といわれ、グスクの跡が残る

真謝は主要な港の一つであり、「今日や真謝泊明日や那覇港 あさて首里のぼて 按司す拜ま」という歌が伝わる。しかし、御嶽は集落よりも山側に位置していることは、その御嶽の由来は港の発展に

先立つことを示すかもしれない。

内陸部の祭地

比嘉の背後の登武那覇は、グスクと伝わり、他のグスクのように明瞭ではないが石垣がみられる。山の緩斜面が園地となり、周囲を樹木で囲み、奥行き10mほどの広場が造られ、登武那覇の神庭といわれる。神庭は拜所で、リュウキュウマツなどのやや大きな樹木の前に、径50cmほどの石が数個置かれる(図13)。そこより東方に奥武島、奥端島を経て、ハテの浜までサンゴ礁が続く。ハテの浜から東方25kmに渡名喜島が望め、その25km東方に慶良間諸島、さらに25km東方に沖縄本島がある。

宇根ヌル殿内が、登武那覇の麓付近にある。殿内は白い瓦葺で、民家のつくりである。境内には、鳥居と石造りで水色に塗られた祠堂がある。中には三ツ石も立てられている(図14)。さらに付近の緩傾斜地に久米原御嶽があり、サトウキビ畑の奥に、リュウキュウマツが1本立つ。

また、真謝の集落には天后宮がある。中国の航海の神である天妃を祀る。三間四方の平入り入母屋造りの本瓦葺きの堂で、小さな厨子の中に天妃像を安置し、その前に香炉が一つ置かれる(図15)。1756年、唐の冊封使の船が真謝港外で難破し、それを機

に創建された。菩薩堂ともよばれる。天后、天妃、また菩薩も、中国沿岸部での海の女神、媽祖の呼び名である。道教の女神は仏教とも習合しており、久間地の土帝君の弥勒と同様に、習合したものが導入されたと考えられる。

小島の祭地

対岸に奥武島を臨む泊には、御嶽ではない大きな堂があるが、その名は不明である。また1989年には、大きな石製の海神碑が建てられている。集落は高地より低地に移動したが、航海安全や漁業の豊漁を祈願する祭地は後世のものであり、なお創られていることがうかがえる。

奥武島との間に浅い礁湖があり、その上に橋がかかる。多角形の石畳が海岸に露出し、畳石といわれる。樹木の下に、琉球の創世神、アマミキヨの名の円形の井戸がある。奥武島は久米島でも最東部にあり、沖縄本島からの久高島の位置にあたるが、アマミキヨの名の由来は不明である。

奥武島の北側の岬側に、西崎火神が祀られる。自然の石垣の前に、小さな石碑が一つ立てられる。ここは、奥武島では西部にあたる。同様に、石垣を背にし、クバの木の生えた、小さな石組みのウガンジョが、付近にみられる。

4) 南東部

南東部には、久米島最大の海岸平地が広がる。海岸付近は、小規模な砂丘となっている。また内陸側にある集落は、複数列の砂丘の上にある。北東から南西に伸びる海岸はイーフとよばれ、礁湖に面するため波が静かなビーチとなる。イーフビーチは埋め立てられて、1990年頃からリゾートホテルが増えたという(図16)。

祭地の変化

内陸側の謝名堂に、ナンジャジョー：南謝門がある。鳥居が建てられ、堂はコンクリート造りで、琉球の赤い本瓦で葺かれる(図17)。堂の中には石と香炉が置かれる。稲大祭の後には、臼太鼓という祭祀舞踊が行われ、南謝門節が歌われた。

比嘉集落の古島で、原になって

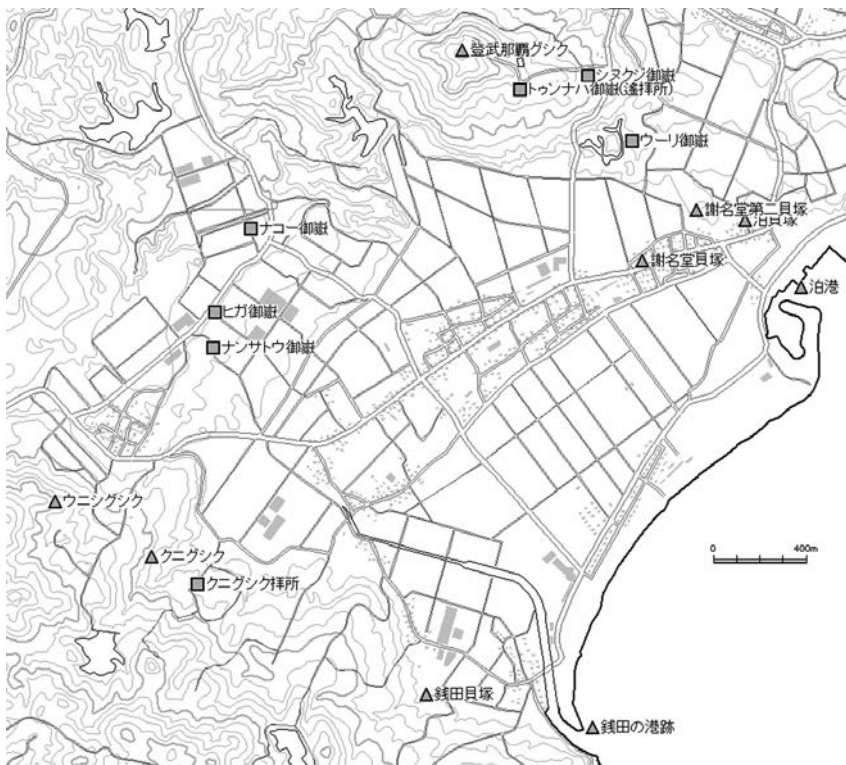


図16 南東部の御嶽と遺跡

謝名堂、比嘉、真我里、山城、銭田について、御嶽と遺跡を示す。

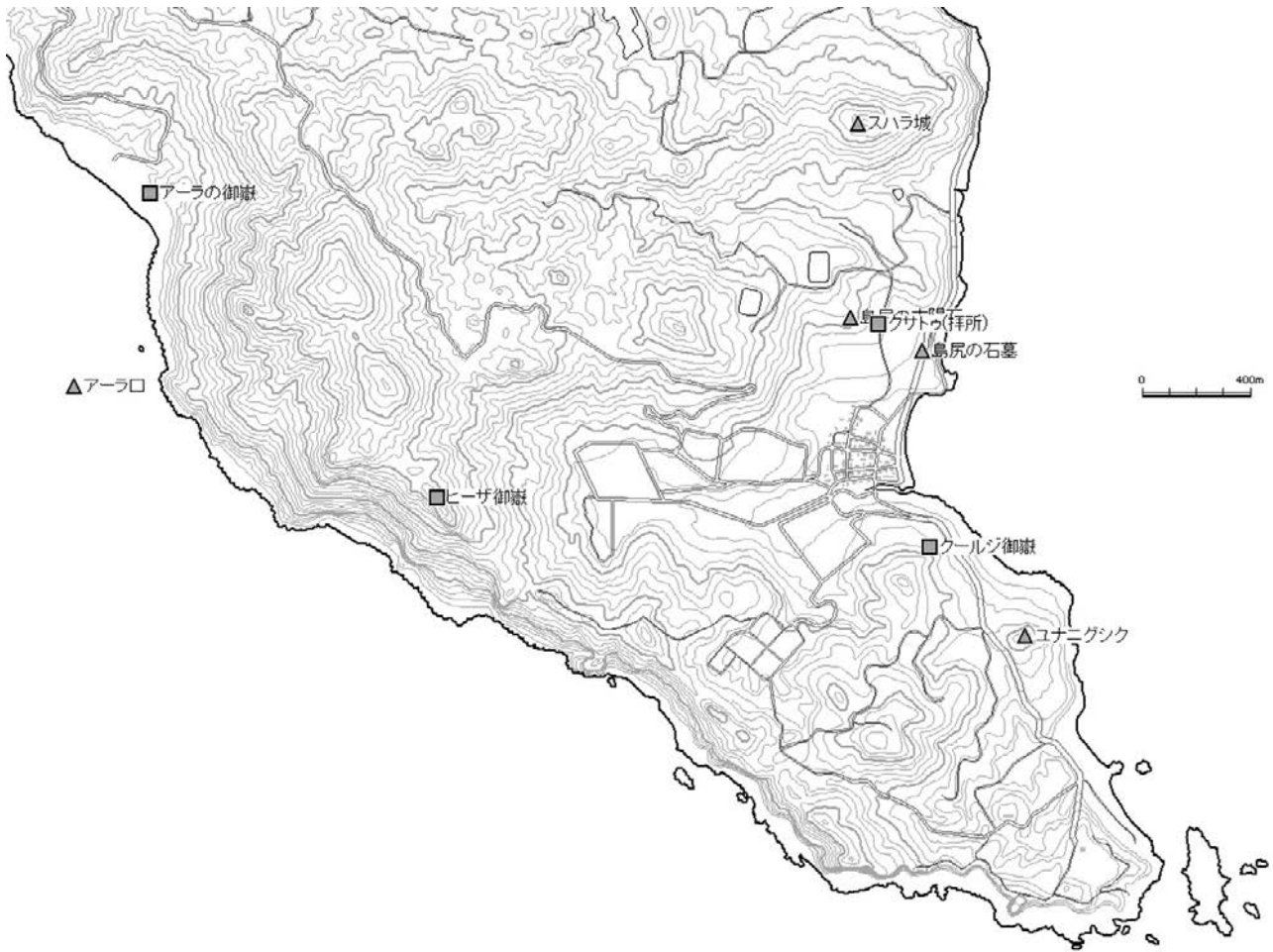


図18 南部の御嶽と遺跡

島尻について、御嶽と遺跡を示す。

いる地に名幸ウタキがある。比嘉のヒージャ：比嘉御嶽には、新しい3間半四方のコンクリート造りの堂が建つ。赤瓦で葺かれ、鳥居も建てられている。ナンジャトウ：並里ウタキには、簡単なコンクリート造りの祠が建てられ、その中には4個の丸石と長い石、また香炉が置かれる。

5) 南部

南部の島尻は、山地と丘陵で、海岸は海食崖となる。島尻は、サンゴ礁の海面下が切り込まれ、真泊、兼城とともに、港となる。海岸に黒石フルシという、大きな黒岩がある(図18)。

固有の葬祭

島尻ヌル殿内は、2間四方のコンクリート造りの建物である(図19)。島尻では、かつて風葬が行われた。海岸の石の上に棺を置き、青いクバの葉をかぶせたという。また海岸の緩斜面に、石積墓が作られている。付近は草地で、ルリハコベなどが茂るが、毒性があり、魚を獲るのに使われたという。御嶽にはクバなどの樹木があるのに対し、墓所には樹木は

みられない。

御嶽の復元

南部山地の儀間側にあるアーラ付近は、険しい斜面が続く。下部斜面を通る道路の下方は、海岸の樹林となり、さらにその下が浜となる。浜からは兼城方向に、礁湖が続いている。アーラより南側、島の南西部海岸は、海食崖が続く。アーラはアラサキであり、峻嶮な地を示すと考えられる。

アーラには、かつて集落があった。現在も年1回、旧五月十五日に、儀間ノロが来て、祭りがされる。アーラの御嶽には、2003年6月に新たな建物が作られ、アーラ神殿と記されている。2間四方のコンクリート造りの建物である。コバデイシー：モモタマナ、の木が成長している。パパイアも植えられているが、浜辺のためによく育たない(図20)。

6) 南西部

儀間から嘉手苅、さらに兼城、仲泊にかけて、まとまった海岸低地となっている。山側の上方には、中位段丘面が広がる。海岸付近は低い砂丘となる。

久米島最大の白瀬川が、深く谷を刻んでいる。谷沿いに、琉球石灰岩がみられる。沖合に干瀬が走り、イノー：礁池が広がる(図21)。

儀間の祭地

ヒラマチ：平松御嶽には、小さな祠がつくられ、平松神屋と書かれる(図22)。ヒラは、傾いた地である。マチはマキヨで、松ではないという。周囲はサトウキビ畑で、石籠が大きな木の下にある。石籠は、本来はなく、2003年に造られた。3個の丸石で竈がつくられ、火の神、竈の神を示す。大きな石も一つ立てられる。

祭りでは、海の神に祈るといふ。そのイービには、中国の影響が入る。何千万円もの紙のお金が、あの世のために燃やされる。線香を供えるが、火は焚かない。

儀間ヌンルンチは、広い敷地にある。木造で、白い瓦葺だが、一部に赤瓦が使われる(図23)。近くの儀間志良堂蔵は、そのヲヒヤにかかわる。コパデイシー：モモタマナの大樹がそびえ、その根元に、3つの大石が置かれる。

城と井泉

嘉手苺にはカー：井泉が多く、ウフ殿内ガーが、久米島高校の近くにある。またムラガーがあり、周囲を樹木で囲まれる。

伊敷索城が、段丘面上にあり、その西側は、白瀬川が侵食した比高40mの崖となる。城内に3つの廓がある。城の隅には、宇江城に向けて、イービがある。この先には、男は入れない。木が鬱蒼と茂り、3枚の平たい石が立てられ、香炉が置かれる。神を祀る御嶽は城よりも古く、御嶽のある地に城が造られたといわれる。またこの城では、実戦はなかったという。

城の下方の神庭には、奥にクバの木があるが、明瞭な石組みはない。五月ウマチーと六月ウマチーが、この前に作られたローカヤーで行われる。細枝を柱



図21 南西部の御嶽と遺跡

儀間、嘉手苺、兼城、大田、仲泊、鳥島について、御嶽と遺跡を示す。

にして、細竹を白い紐で結び格子状に組み、その上にクバの葉が置かれる(図24)。

城の端、白瀬川の急崖に墓があり、18世紀の人骨が出るという。亀甲墓の様式が入る前である。被葬者の身内や知り合いはなく、三代たつとわからなくなる。骨は7年で洗骨、33年で移し替え、甕は壊すこともあるという。

清水は、井戸が脇にある。現在はブロックで囲われている。クバなどで囲まれた広場に石組みが置かれる。木は切らない。祈る方向が重要で、ここでは伊敷索城を向いている。

港と祭地

白瀬川の右岸は、王府の時代にも重要な港で、現在はフェリーが発着している。丘の上に、旧行政機関の具志川間切蔵元があった。それに隣接して兼城御嶽がある。高さ数十cmほどの石垣とクバの木で囲まれる神庭に、やや大きな神石が置かれ、石組みが造られる。隣接した兼城ヌル殿内は、新しい建物である。

知仁御嶽は、海岸から100mほどの島にある。ガラサームイといわれるカラスの島で、岩塔がそそり立つ。

ウルル御嶽は、小さな段丘状地形の崖の位置にある。近くに井戸があり、段丘面はサトウキビ畑となる。

表1『琉球国由来記』中の信仰施設と神

間切	村	祭祀施設					神			地域ごとに集計 神名		
		御嶽	御イベ	殿内	ノロ	ヲヒヤ	御前	神	火神	ガナシ	御イベ	ヒヤク
具志川	具志川	0	1		1		3		1	1		3
	仲地	5		1	1	1		5	3	8		
	西目	4			1	3		4	4	8		
	兼城	2			1	1	2	1	2	3	2	
	山城	1			1	2		1	3	4		
仲里	儀間	2					5					5
	宇江城	2					6	1				7
	比屋定	4					2	3				5
	島尻	2					2	1				3
	宇根	5					3	4				7
	真謝	2						2				2
	比嘉	2					2	1				3
		31	1	1	5	7	25	23	13	24	34	3

新たな祭地

鳥島は、久米島の北東200km余にある硫黄鳥島から、100年ほど前に火山噴火のため移住してきた人たちで作られた町である。硫黄鳥島と久米島では、今でも言葉が違うという。40kmほど北東の、粟国島から移住した人もいる。明治維新のときには、那覇から武士たちも来たという。

鳥島には七^{ナナウタキ}嶽神社がある。七嶽の名は、移住前に硫黄鳥島にあった、七つの御嶽の合祀を示す。鳥居や石灯籠があるが、鳥居の両端は跳ね上がり、中国風の様式となる。

なお鳥島には、霊堂がある。集落の共同納骨堂である。道教、仏教、その他が混じる。

井泉, カー

兼城付近には、井泉が多い。東ヌ井泉^{アガリヌカー}や、西ヌ井泉^{イリスカー}（殿内ヌ井泉）がある。大田にも井泉ヌ上ヌ井泉^{カーヌウイヌカー}があり、仲泊には中泊井泉^{ナカルメーガー}（東ヌ井泉）や、上ヌ井泉^{ウイヌカー}（西ヌ井泉）がある。鳥島には、インテインターヌカー、クワンサンミーヌカーなどがある。さらに、ムラサー、ムラガーといわれる井泉がある。井泉は御嶽とは異なり、多くは井戸そのものであるが、祭祀の対象とされる。

IV 祭地の由来について

1) 御嶽と祭地

琉球王府の下での信仰施設

土地に神仏を祀り、また土地そのものが祀られ、

あるいはその土地を介して神仏に通じる。またその土地で祭祀が行われ、あるいは秘跡の伝承などを伴い、そうした土地に他の土地と異なる想念、表象が付随する。そうした地は、その岩や水、樹などの自然的景観、清澄に整えられた空間、象徴的な信仰施設を備えて、聖地や霊地とよばれるようになる。そのため祭地・霊地、またその祭祀を分析することにより、その土地のもつ意味が明らかになるものと考えられる。

先述のように久米島では、古くからの固有文化に、15世紀の按司、16世紀の王府、17・18世紀に島津・清、19世紀には明治政府が大きな影響を与えた。久米島の固有の姿は明らかではないが、古記録は1713年の『琉球国由来記』（伊波普猷，東恩納寛悟，横山 重，1962）に遡る。

そこに記された、祭祀・施設について、地域別にその数を集計する（表1）。具志川間切と仲里間切では大きく異なる。祭祀施設は、仲里ではみな御嶽とされているが、具志川では御嶽のほかに、ノロ、ヲヒヤと記される。行政組織ごとに不統一であるが、御嶽とノロやヒヤは、先述のように一体であり、必ずしも類別されなかったのかもしれない。

御嶽の特色

お嶽は「神います杜」の意味で、クバ（ピロウ）、アザカ、琉球青木や、シキヨ、藤蔓モドキが茂る。神はお嶽の高いピロウを目当てに天降りし、またお嶽そのものが神である。お嶽の頂上または中心が、「いべ」である（仲原善忠，1969c）。

久米島で近年の改変のない御嶽は、比較的規模が小さい。およそ径10mほどの地が樹木で囲まれ、その前の空間に石組みが置かれる。御嶽は禁足地であるが、一方で阻むものはない。御嶽内は整えられているが、周囲と厳然と区画するわけではない。

御嶽には、必ずしも特徴のない土地も選ばれ、島内でも地域により御嶽は異なる。また御嶽には文字を記さない。御嶽の多くの木は台風で倒れ、20～30年で変わるため、古い木は無いという。また集落の山腹の谷などから山麓や低地への移動に伴い、御嶽も移動した。近年ではさらに、御嶽の変化は大きい。御嶽の伝統的様相に対し、とくに仲里では多くの御嶽に石籠あるいは祠堂が置かれるようになった。こうした変化は、御嶽を始めとした祭地の由来を、一層不明にしている。

御嶽で祀るものは不明だが、御嶽を始めとした祭地は山や森、祖先の地、井戸、「ありがたい」地、さらに貝塚の傍にもあるという。イービがあり、イービメーの石が置かれる。また御嶽には、^{クサテムイ}腰当森、の意味もあるが、山に向けて遥拝しても、山そのものは御神体ではないという。また御嶽の祀られる方向は一定せず、東方のニライ・カナイとは必ずしも結びつかない。

ウガミとウトゥシ

御嶽は、首里王府下での聖地の総称といわれる。久米島では、御嶽はウガミで、拝所はウガンジュである。山に入って稲作を始め、ウガミが作られた。仲地、山里の本来のウガミは、ウフタキ、マーレー、クグシクにある。集落が移動すると、新たなウガミを造ったため、ウトゥシは少ない。斜面上方から、ウガミ、集落、田が続く（保久村昌欣，2011）。

現在の仲地には4集落があるが、ウフタキウガミ、マーレーウガミから移動した人たちは、マナカチに住んだ。そのほかの3集落ではクグシクウガミが見えなくなり、イリンダカリはヨナハウガミ、ダキルン^{ダキルン}ウガミを作り、アサトゥンシマもアサトゥウガミを作ったと考えられる（保久村昌欣，2011）。

久米島の多くの御嶽では、周囲にクバなどの樹木が茂り、平らな地が作られ、小さな神石が組まれる。木々に囲まれて隠れた空間に、丸いまた長い自然石がゆったりと配置されて、清澄で整然とした空間が形作られる。それらは周囲の自然と調和しており、人工的な造作は一切示されない。

御嶽の規模は概して小さく、巨大なものはない。とくに集落は下方に移動したが、御嶽は故地の御嶽の遥拝所、御通しであって、他の機能は必要としないならば、巨大さや壮かさなどは無縁である。この新たな御嶽の、古い御嶽を望む機能、すなわち御通し、遥拝性は、御嶽の主要な聖性の一つと考えられる。さらにこの遥拝性は、故地の御嶽での本来の性格、神と人をつなぐ取り次ぎ、にもとづくことが考えられる。

2) 御嶽と祭神

御嶽の神

先述の1713年の琉球国由来記には、御嶽の神名も付されるが、それに先立つ1703～05年の成立とされる仲里間切旧記には、19ヶ所の御嶽と、より詳細な神名が記載される（仲里村史編集委員会，2000b）。

久米島に固有のウガミは、基本的にウトゥシであるにしても、琉球王府の統制下で、御嶽名とともに記された神名は、その時点で御嶽の性格の一端を示すと考えられる。ただし琉球国由来記は、久米島のみならず琉球全土で作られおり、王府での編集の影響も考えられ、固有祭祀そのものとはみなせない。また御嶽も全てが報告されたのではなく、ほかにも多数あると考えられている。

先述のように、琉球国由来記に、嶽々神と火神の名がある（表1）。具志川ではとくに、火神が多い。一方仲里では、神と御前を分けて記している。神名末尾は、具志川ではガナシ、仲里では御イベとなる。具志川間切では、具志川城内イベ1と御嶽12は神を祀り、森のツカサガナシの名がある。君南風殿内1、ノロ5とヲヒヤ7は火神を祀り、アカゴチャガナシの名がある。仲里間切では、御嶽19で神を祀り、御イベの名で、大ツカサ、若ツカサが多い。

主要な神観念

集落の守護神は、御嶽に天降る神や、太陽=火の神が中心だった。祖先崇拜は13世紀頃から始まり、17世紀以降には御嶽信仰や火の神信仰は、祖先祭に位置をゆずる。ただし神女は、祖先の祭礼には関与しない（仲原善忠，1969b）。また、天上界はオボツ・カグラであり、水平線の彼方にニライ・カナイがある。ウタキに祀られる神は、祖先神という考えが強く、ほかに火の神と水の神がある。神のほか、セジという霊力があり、人間や物につけば本来以上の力となる（仲里村史編集委員会，2000c）。

一方で、ヤジャーガマ、ヤッチノガマなどの洞窟墓があるという（桜井徳太郎、加藤正春、小川順敬、田村敏和、1982）。このことは、御嶽は天や海を直接示さぬ一方、祖先のような身近なものとも異なることを示している。

久米島は沖縄本島とのかかわりは深いが、固有信仰では大きく相異している。御嶽に天の神、また祖先神は必ずしも見られない一方、神名として顕著であるのは、火の神である。御嶽は本来、祖先信仰と結びつかないが、そのかかわりが指摘されるのは後世の場合と考えられる。

火の神

お嶽の神は部落共同体の神で、火の神は家の神である。火の神は、ニライ・カナイの大主、太陽である。火の神は、道教のカマドの神と混淆した。太陽はテダと表記し、聞得大君はテダシロ大神といわれる。また神名のアカグチャ：赤口、は赤い焰を示し、ジュールマー：地炉の女性、は囲炉裏の女神を示す（仲原善忠、1969c）。

そうして、1713年の琉球国由来記では、御嶽の神名に火の神が多数みられる（表1）。御嶽はオボツ・カグラやニライ・カナイと無縁ではないが、太陽につながる火の神が多いことは、御嶽の性格の一端を示している。三ツ石で祀られる火の神は、太陽への取り次ぎを示しており、御嶽にもつながると考えられる。

君南風殿内にも、火の神が祀られる。三ツ石の御神体の座敷火神は、本島では一番座に、久米島では二番座に置かれた。18世紀初頭には、赤口は台所の竈、地炉は囲炉裏と分化していた。久米島では、長く地炉の火神が祭られていた（伊従 勉、2005）。

すなわち、御嶽の神名に火の神がみえること、また祭神としての火の神の重要性から、火の神は御嶽の性格に深くかかわる。竈の神としての火の神は、御嶽とは別に屋敷内にも祀られる火の神に示されている。そのため御嶽の場合、お通しとしても、とくに太陽への取り次ぎが重要であると考えられる。ただし、伝統的な御嶽のたたずまいは、樹林に囲まれた静寂な空間であり、それが太陽の取り次ぎにどのようにかかわるかは不明である。

3) 御嶽と神女

根神とノロ

久米島ではヒヤは按司や首里王府と争わず、土着のノロの君南風を高級神女として認知させた。君南

風は、伊平屋の阿母加那志、今帰仁の阿応理屋恵とともに残る。君南風の下にノロ（ヌール）、根神、捷神、その他の神女がおかれた。部落で一番古い家は根所、根屋で、当主は根人、ヒヤとよばれ、その姉妹が根神であり、神女でも根神のみが氏族的団体に属した（佐藤 優、2007）。

神女は、部落の根神から、組織されたノロに変わる。神女は、祖先の祭礼には関与しない。王府では、仏教と儒教が中心となり、聞得大君以下の三十三君は整理され、固有信仰は農耕儀礼と結びついたものだけが残った（仲原善忠、1969b）。

根神はヒヤの姉妹であり、オナリ信仰を継承している。ノロの由来は不明であるが、琉球王府の統制を経て、地域的団体の司祭者として残ることになった。こうした祭祀の氏族から地域への流れの中で、御嶽への認識、祀られる神、祭祀のありかたなどへの影響があったことが考えられる。

ノロと氏族

仲地には、具志川ヌールとユナハン蔵下ヌールがいた。両ヌールの祭祀に、君南風はかかわらず、中城按司子孫の太史氏、具志川按司子孫の美濟氏もかかわらなかった。一方稲大祭での仲地・山里の神役は、和州氏系統の君南風と、美濟氏系統の1名、太史氏系統の7名である。仲地・山里では按司系統も神事に参加するのは、君南風が仲地・山里の村落祭祀を主宰することに関係する（小川順敬、1982）。

ウガン儀礼は、仲地の4地区、山里の2地区のそれぞれで行っていた。氏には宗家と名乗る文字があり、太史氏は仲地のアガリ殿内と「昌」、美濟氏は西銘の石垣殿内と「智」、和洲氏は山里の山里殿内と「景」とされる。君南風殿内は仲地にあり、居住する山里殿内は山里にある（桜井徳太郎、加藤正春、小川順敬、田村敏和、1982）。

先述のように、久米島固有の社会として、シマやダカリ、マキヨとよばれるムラに、ヒヤがいて、その姉妹が根神となり祭祀を行っていた。後に琉球王府の統制により、10名のノロとその上に君南風の組織が作られ、氏族の祭祀から地域の祭祀へと変わっていく。

ノロ、また君南風は王府の統制を受けて、稲大祭のような農耕儀礼を斎行する。ただし上述のように村落の地域的祭祀にしても、ノロと君南風のもとに集まる神役は異なり、そこには按司子孫とされる諸氏族が関連している。

このことはノロ、さらに君南風が地域の祭祀を主宰するにしても、それぞれの出自に無関係ではないことを示すと考えられる。ノロはもちろん、君南風も按司以降には久米島にいて、氏族が作られていた。琉球王府により、有力なヒヤの根神よりノロが、按司のオナリより君南風が組織化されたとすれば、ノロや君南風には、出自の氏族との関係が引き継がれると考えられる。

先述のように16世紀ころから集落が下方に移動しており、城周辺に居住していた按司の氏族も移動したことが考えられる。そうした頃に王府による統制がおよんでおり、地元組織が変化する中で、新たな組織が導入され、それぞれが重畳しながら存続しているとみられる。

久米島には神アサギがない一方で、殿内があり、祭祀ではローカヤーが作られるなども、集落移動などとかかわるかもしれない。

君南風

君南風は、1500年に八重山に赴いたとされる。さらに1566年には、「くめのくしかわまきりの、にしめのうちま人もとハ、……、御ゆるしめされ候、一人きみはいの大あむに、たまわり申(候)、しよりよりきみはいの大あむか方へまいる」とある(君南風大阿母知行安堵辞令書、沖縄県今帰仁村歴史文化センターの調査記録、2010年5月)。

西銘のウチマ人チモトは、^{キミハハイオオアム}君南風大阿母と、首里より認められる。君南風はその系統からも按司の氏族とかかわるが、ウチマ人とは沖縄本島とのかかわりを示すかもしれない。

外来系統の按司は滅ぼされるが、君南風は最高神役となり、外来系統の統合のシンボルとなる(小川順敬、1987)。君南風の系統の太史氏、美濟氏、和州氏、仁氏は、久米島伝統の神事ではなく、君南風を中心とする神事・祭祀に関与する。君南風の初代は仲里、二代は仲里から仲地・山里に移り住む(小川順敬、1985)。

琉球王府の統制で神女が組織化された頃には、君南風はすでに久米島にいたにもかかわらず、固有の祭祀制度とは異なるものであった。琉球王府による神女組織の三十三君は、ほどなくして整理されるが、伊平屋や今帰仁とともに、久米島に残ったことは、君南風はすでに実質的な祭祀の主権者であったことが考えられる。君南風の上国は1726年頃までであり、以降は王府の統制の外にあったと考えられる。

また先述のように、君南風の名称には、南風が豊作や交易品をもたらすことにつながると考えられる。さらに、按司の城には、カナン君、ヨヨセ君、セノ君、オモイ君などの神女があり、久米島の按司系統の氏族では、オナリは「君」と呼ばれ、また三十三君であることも、君南風の呼称につながると考えられる。

君南風と海の神

君南風の八重山渡航のおもろは、多くが巡行叙事で、君南風は航海の守護神とみられる。1605年の琉球神道記で、託女三十三人は弁財天とされた。また媽祖とも習合している。君南風は、唯一王族に属さない。久米島は海上航路の要衝であるために、航海の守護神として置かれた(世礼国男、1971)。

1703年の成立と推定される君南風由来并位階且公事でも、征伐の記述はわずかで、君南風は航海の守護神であった。海上安全のオタカベが、君南風殿内、兼城や宇根のノロ殿内の火の神などで行なわれた(島村幸一、2000)。

三十三君が定められた頃には、航海安全が最重要であったが、三十三君は1667年には廃止されるので、航海の守護神の性格は、八重山渡航に伴うものと考えられる。先述のように稲大祭などは、農耕の管理に結びつくが、港の周辺の地では海上安全も重要となる。

ここで君南風が唯一王族ではないのは、君南風の特徴的な位置を示している。

渡嘉敷には^{チンペーヤカ}君南風窟とよばれる岩屋がある。君南風加那志という、グシチャーノロが泊まったという。渡嘉敷島の^{アフアリ}阿波連村では、旧三月三日に^{ハナリ}小島の祠で、祈願をする(とかしきの民話)。

君南風が首里の王府に上る途中に、渡嘉敷がある。そこでは君南風は、具志川のノロと理解されていたことを示している。

4) 御嶽と祭祀

祭地の変化

先述のような集落の移動や神女組織の変化に伴い、祭祀にも変化があり、それは祭地の認識にも影響していると考えられる。現在の祭祀では、豊作祈願やときには雨乞いが行われる。祭地には御嶽のみならず蔵下やローカヤー、道教施設などさまざまなものがあつた。さまざまな祭祀と御嶽は必ずしも結びつかない。御嶽には、願い事はしないともしられる。

一方、御嶽は自然発生ではなく、稲作とともに始

まったともいわれる。さまざまな祭地の由来は、祭祀に残されていることが考えられる。

代表的な旧五月と六月の祭は、現在君南風殿内のほか、嘉手苧・儀間のヌルンチでも行われる。大きな祭祀は、琉球王府の統制の後のものようである。またお盆・エイサーは、真謝、宇根、謝名堂、比嘉、儀間、嘉手苧、西銘、大原で行われている。これらも後世のもので、御嶽にかかわらない。

祭祀と農事

年中祭祀は、稲麦一毛作の農事暦が基本である。王府の祭政的な統合システムに、集落や地域の共同性や固有性の表現がなされる。王府は、麦稲の穂祭や収穫祭で、祭祀の均質化と統一化を図った(伊従勉, 2005)。

六月ウマチは、前日は^{トゥスヌブイ}殿上り、当日は^{トゥスヌマ}殿廻り、翌日は^{トゥスヌイ}殿直しで、神迎え、神送りをする。久米島では^{ローカーヤー}日陰屋で、神アサギがない。儀間・嘉手刈のオモロには、首里の三庫理が示され、伊敷索グスク登城祭祀は首里城に重なる(伊従勉, 2005)。

祭祀の時期や内容にも、琉球王府の影響が強く残る。ただし、王府の統制以前にも、類似の祭祀があった。

稲大祭の農耕儀礼

旧暦六月の稲大祭は、^{ニージュ}根所を中心にした血族集団の祭祀と、村落の祭祀の融合である。琉球国由来記では、正月行事を除き年間20ほどの祭祀があり、主に稲作儀礼である。旧暦五月十五日の^{シツマ}稲穂祭の後の、六月二十五日の^{ウマチ}稲大祭は豊年祭である。二十一日の^{ウマチケ}神迎えでは、君南風殿内にノロが集まり、君南風、トートーが神棚を^{グワッチャ}拝み、ミチャブイをつくる。二十四日に^{ウマチケ}蔵下、根所の庭にローカーヤーが造られる(上江洲均, 1982)。

君南風アムシラレがいて、ノロクムイは具志川、仲地、西銘、兼城、儀間、山城、比嘉、宇根、城ノ口、比屋定にいる。六月ウマチーでは、二十五日には、朝神を君南風殿内、さらに西平蔵下、新蔵下でおこなう。夕神は当間蔵下で行い、さらに宇江城跡へのぼり、上江洲蔵下、新蔵下でおこなう。具志川ノロの案内で、君南風のトートーは城登りをする(上江洲均, 2003)。

祭地は殿内、蔵下が中心であり、多数を巡る。地域の祭祀としての祭地に、そこにある血縁集団の祭地も含めて巡られる。とくに具志川城と宇江城城へのグシクグミは、地域として飛び離れ、集落内の巡

拜とは異質であり、氏族集団に由来することが考えられる。

城での儀礼の要素

六月ウマチーの具志川城での儀礼では、1) 聖域(タマクガニのウタキ)で、君南風、ウッチー、兼城ノロが、具志川城跡の神に祈る。2) ローカーヤーで、仲村渠神人、山里神人、君南風、ウッチー、兼城ノロが、首里弁ヶ嶽に向かって拜む。3) 同じ5人が移動して、北西の中国の方に向かい、ウッチーが花米、御神酒をそそぐ。4) ローカーヤーで、ウッチーが花米をおき、饅頭にお辞儀し、御神酒を地面にそそぐ。5) トートー石に君南風が座り、兼城ノロが御神酒をさしだす。ウムイでなくコイナが流される(沖縄国際大学 総合文化学部 社会文化学科 南島民俗研究室, 2010)。

城内では祭地を変えて、異なる対象に儀礼がなされる。また対象により、儀礼を行うものが異なる。1) は神女のための儀礼で、固有の御嶽に拝礼する。2) と 3) では首里、唐を遥拝し、4) は豊年祭、直会のようなものである。5) は最高位の君南風にノロが拝礼する。すなわち、君南風殿内のある仲地・山里での儀礼と、具志川城また宇江城城での儀礼は大きく異なる。前者では主に農耕儀礼であるのに対して、後者ではそのほかに、氏族、琉球王府、冊封使、神女組織の要素が含まれている。

謡での琉球王府

近世のオモロは、稲二祭、唐船関連の儀礼、冊封使節歓待の儀礼、雨乞い儀礼など限られたときにうたわれた。君南風関連のものは、久米島、仲地綾庭で謡われたオモロである(島村幸一, 2009)。

さらにウムイやキューナがあり、六月ウマチーでは^{ウフ}大ウムイが、^{アサカン}歌われた。朝神では祝女殿内-西銘-^{ニシラ}西平-^{ミングワッチャ}新蔵下を、夕神では^{ユウカン}当間蔵下-上江洲蔵下-新蔵下を巡回し、ウムイを歌う。その一節は以下のようなものである。

すいもい ちょわい／まだらもい ちょわい
あじすいが うゆえ／きはちが うゆえ
うーじみが うゆえ／ひらかーが うゆえ
ぐしちやわぬ ちょわい／かなふくが ちょわい
ちみばえが うゆえ／ぎゆぬすが うゆえ

(沖縄音楽大全データベース, 大ウムイ)

そして首里森・真玉森の御嶽の按司襲・昔人・大君・聞得大君の為、と謡われ、さらに具志川・金福の君南風・ギユの主の為、と謡われる。オモロのよ

うに叙事的ではないが、首里の王が謡われ、按司を襲う、すなわち琉球王府の統制を示す。

さらにこの前段では、ノロ・神が降り、五の神・七の神が組手してオモロセジを今日の日に突き上げ、急いでまたゆっくりと降り、上地は響き下地は鳴響み、と謡われている。神々は勇壮に天降り、豊作の祈願はみられない。

ウムイは人に聞こえぬよう小声で謡うといわれるが、それはこのウムイが琉球王府の側からの内容であることに、かかわるかもしれない。

一方コンナでは、以下のように謡われる。

いーじもい くさていらき うむやぎぬ うやめるぬ あやされが …… うがりから いぬていから たかびら

(沖縄音楽大全データベース、崇びらコンナ)

上江洲森・腰当嶽、ウムヤギの親ノロのアヤサレが、 …… 拝み、祈って崇べる。上江洲の村の親ノロが、拝礼して神迎えをする。このコンナでは、神は村の守り手であり、琉球王府も、豊作の要素もみられない。このことは、上述のウムイとは対照的である。

5) 御嶽の巡拝

祭地の巡拝

沖縄の祭りでは、聖地を巡拝するウガンマイが多くみられる。部落、シマ、間切、全島を、根神、祝女、最高神女が巡拝する(桜井徳太郎、加藤正春、小川順敬、田村敏和、1982)。

久米島でも雨乞いのときに巡拝される。君南風殿内の社殿後方にカミガーがあり、香炉用とみられる40cmの石がある。敷地内の大きな石に、標縄をまわし雨乞いをした(桜井徳太郎、加藤正春、小川順敬、田村敏和、1982)。山里のアマグイバンタ、兼城のアマグイマーで、雨乞祈願された。ハンニーザチ先の、空港西のリーフの岩で、雨乞いをする(仲里村史編集委員会、2000a)。

2013年8月11日に、15年ぶりに君南風殿内で、雨乞い御願祭が行われた。君南風が首里弁ヶ嶽にお通し、雨乞い祈願、雨乞い石を回りながら水をかける。前の道で水をかけあいながら、綱引きをする。シュケツ御嶽とシライミ御嶽で雨乞い祈願をし、ハンニー崎の寄り石でわらを燃やす(琉球新報)。

雨乞い祭は臨時祭であり、稲大祭とは祭地が異なる。シュケツ御嶽は砂丘上にあるが、例外的な位置にある。さらにサンゴ礁の岩が祭地とされることも

稀である。この由来は明らかでないが、雨乞いでは龍神に祈願することが多いが、龍神はまた海神であることから、海の方に向かって雨乞い祈願することが考えられる。また最西端の岩で行われるのは、水神を、太陽・火の神に対峙するものとして、捉えたことによるかもしれない。

なおハンニーザチは島の最西端に位置しており、東方が太陽を示すのとは対極にある。梅雨末期には、北上した梅雨前線に向かう南西風で降水がもたらされるが、猛暑の干ばつ時には島の最西端の地において、南西風を呼び戻す意味があるかもしれない。

他でも綱引きが行われるが、干ばつときの「雨乞い綱」が起こりとされる。また綱引きはお盆にエイサーなどともに行われるが、雨乞いでの綱引きは、その臨時祭を示すかもしれない。

山岳と海上安全

久米島の東方の座間味では、とくにニライ・カナイの神、航海守護神をまつる御嶽は、山頂や岬の端などにある。旧暦九月下旬のウグンサキ：御嶽登りで、大御嶽、小御嶽、仲御嶽、赤崎御嶽に詣で、航海安全、健康、豊作、豊漁を祈る(宮里勇清、大村太郎、金城信盛、知念 繁、1989)。

君南風殿内からは、宇江城城にグシクグミされた。久米島最高所の御嶽には、海上安全の要素があったかもしれない。ただし天后宮のように、後世の航海安全にかかわる祭地は、海岸付近に多くみられる。このことは久米島では、御嶽は海とのかかわりが薄いことを示しており、君南風も当初は航海の守護神と位置付けられたが、後世には薄れたこととことにもかかわると考えられる。

V おわりに

久米島において、御嶽をはじめとする祭地について、現地での調査を行い、またその由来について検討した。

久米島では御嶽は、内陸側の山麓に多く、海岸には少ない。古い御嶽には、樹木と石のみがあり、さらに集落の位置や山そして森に深くかかわる。御嶽は集落の上方に位置し、聖地を望む地にある。久米島では本島とは異なり、神アサギやユタなどがみられぬ一方、祭祀ではローカヤーのような施設が作られて、固有の特色がみられる。

しかし御嶽にもさまざまなものがあり、かつ変容

している。琉球王府や道教の影響も、随所にみられる。御嶽には近年祠堂や鳥居が設けられるようになったが、本来そうしたものはなく、御嶽の性質は異なるものになっている。これらの後世での導入は、固有信仰には希薄な要素を補うものであるとすれば、反対に固有信仰の性格の把握に有用である。

また御嶽について、仲里間切旧記、琉球国由来記などから知られる。それらは18世紀初めの記録であり、また琉球王府の調査項目に沿うものであるが、琉球の中での久米島の相対的な位置を知ることができる。

そのため久米島に固有の祭地の由来について、現在のそれらの姿に加え、旧記などでの記載から検討した。祭地の由来について、御嶽および関連施設、祭神、神女、祭祀、巡拝などからの検討の成果は、以下のようにまとめられる。

1. 御嶽などの聖域は、マキヨという血縁組織や、ムラやシマという集落組織に、もとづくと思われる。御嶽では、樹木で囲まれた空間に、神石が組まれる。御嶽は集落の移動に伴い、新たに設けられる。御嶽はウガミ、ウガンとよばれて遥拝されるが、お通しの意味をもつ。祭祀ではローカーヤーが作られるが、神と人をつなぐ地とみられる。
2. 御嶽をはじめとした祭地には、森の神、火の神、井泉の神、雨の神、海の神などが祀られる。18世紀初頭の御嶽の祭神には、森や人の名を示すものもあるが、とくに火の神が多い。火の神は太陽を示し、竈にも結びつくが、自然を対象にしていると考えられる。なお、久米島では風葬や石積墓がみられるが、御嶽などは本来、祖霊や祖先崇拜とは結びつかなかった。
3. 久米島では、小さなムラの氏族に根神という神女がいたが、琉球王府により10人のノロが組織化される。ノロの上におかれた君南風は、按司系の氏族にかかわる。御嶽を設けた集団にくらべて、君南風-ノロの神女組織は、後のものと考えられる。
4. 大きな祭祀は、主に君南風殿内や各地のノロ殿内などで行われる。祭祀の齋行は君南風やノロであることによるが、一方御嶽はそうした王府の統制以前の祭祀と結びつくと考えられる。ただし、君南風やノロには、組織化以前の出自の氏族があり、祭祀は御嶽でも行われる。
5. 御嶽などにさまざまな神が祀られ、ウガンマ-イといい、神女らがそれらを巡る。雨乞いの際には、御嶽や大石を巡って儀礼が行われ、とくに島の西端、海神とみられる祭地にも赴く。雨乞いでは綱引きのような、儀礼あるいは奉納神事もみられるが、後世の導入とみられる。

整えられた御嶽は杜を模し、祭祀で君南風がヤブランのミチャブイをかぶるのも、樹木の生命に通じるとみられる。御嶽には神石が組まれ、三ツ石もみられるが、火や日を示しており、海の彼方のニライ・カナイ、日の神の東方世界、豊穣に通じる。御嶽が集落の上方にあり、また雨石、井泉を祀り、山上の城に上るのは、天や風、気を示し、天上世界の観念であるオボツ・カグラ、あるいはオボツの山と神の座、に通じる。

一方久米島では、御嶽はその祭神名にもかかわらず、祖霊の要素が希薄であり、またユタもみられない。また稲大祭で御嶽のほかに蔵下などをまわるが、その一方で御嶽には稲作の要素が希薄なことを示すように考えられる。

御嶽に祖霊や稲作の要素が希薄な一方で、その周囲の自然や観念的世界との結びつきは明瞭である。そのため御嶽は、稲作以前に由来する固有の祭地であり、従来も指摘されているように、自然ないしは神と人を取り次ぐというお通しの地、という性格が強く現れている。それらの由来は明らかではないが、久米島における祭地の基本的特色と考えられる。

謝辞

久米島では、2009年10月、2011年2月の現地調査で、保久村昌欣氏、島袋磯夫氏には島内の御嶽をご案内いただき、現在の君南風の、島袋訓子氏にも殿内、城、儀礼ほかについて多くの御教示をいただきました。また旧久米島自然文化センターをはじめ、多くの方々にお世話になりました。あわせて感謝申し上げます。

文献

- 石島 英(1989)：季節風と大航海時代の航海。沖縄管内気象研究会誌，17，p.64。
 伊従 勉(2005)：『琉球祭祀空間の研究：カミとヒトの環境学』中央公論美術出版，780p。
 伊波普猷，東恩納寛悟，横山 重(1962)：琉球国

- 由来記巻十九、『琉球史料叢書 第二巻』井上書房, 560-573.
- 上江洲 均(1982): 久米島の年中行事. 沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂, 309-344.
- 上江洲 均(2003): 信仰. 久米島西銘誌編集委員会編『久米島西銘誌』565-591.
- 大城武雄, 宮城邦昌, 玉城 章(1992): 久米島空港の風の特性的について. 沖縄管内気象研究会誌, 41-42.
- 沖縄気象台久米島測候所(2004): 『久米島測候所 62年のあゆみ』39p.
- 沖縄久米島調査委員会(1983): 久米島の民俗遺跡. 『沖縄久米島: 「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書 資料篇』弘文堂, 441-519.
- 小川順敬(1982): 沖縄久米島の村落祭祀—具志川村仲地・山里を中心として—. 宗教学論集(駒澤大学), 11, 65-85.
- 小川順敬(1985): 君南風職の継承について. 宗教学論集(駒澤大学), 12, 51-72.
- 小川順敬(1987): 君南風の出自伝承について. 宗教学論集(駒澤大学), 13, 235-242.
- 沖縄国際大学 総合文化学部 社会文化学科 南島民俗研究室(2010): 『民俗研究38 久米島・仲地・山里の六月ウマチー調査報告』, 137p.
- 河合洋尚(2004): 「場所」創出の重層性—沖縄久米島における御嶽再生活動をめぐって—. 民俗文化研究, 5, 93-111.
- 慶世村清記, 末吉秀樹, 比嘉哲也, 山口直輝, 西栄次郎, 外間宏信(2004): 久米島空港の気象特性(風の特性). 沖縄管内気象研究会誌, 32, 49-54.
- 桜井徳太郎, 加藤正春, 小川順敬, 田村敏和(1982): 共同体祭祀の構造と機能—とくに祭地・祭儀と神役の継承—. 沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂, 357-388.
- 佐藤 優(2007): 開国—私のナショナリズム 君南風. 本の窓(小学館), 30(10), 28-37.
- 島村幸一(2000): 久米島オモロの特殊性について—神女, 君南風を考察して—. 史料編纂室紀要(沖縄県教育委員会), 25, 189-206.
- 島村幸一(2009): 久米島オモロと『君南風由来并位階且公事』所収の「仲里城祭礼之時おもしろ」. 立正大学文学部紀要, 25, 43-73.
- 世礼国男(1971): 久米島おもしろについて. 外間守善編『沖縄文化論叢 第四巻 文学芸能編』平凡社, 213-246.
- 仲里村史編集委員会(2000a): 仲里村の地名. 『仲里村史 第六巻 資料編5 民俗』, 153-231.
- 仲里村史編集委員会(2000b): 仲里村所在の御嶽. 『仲里村史 第六巻 資料編5 民俗』, 341-378.
- 仲里村史編集委員会(2000c): 人生儀礼. 『仲里村史 第六巻 資料編5 民俗』, 579-599.
- 仲原善秀(1982): 久米島の歴史. 沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂, 1-68.
- 仲原善忠(1969a): 「天気予想一斑」は堂のひやの作にあらず. 『仲原善忠選集 下巻』沖縄タイムス社, 127-147. (初出1940, 『久米島史話』潮音社)
- 仲原善忠(1969b): 固有信仰のおとろえ. 『仲原善忠選集 下巻』沖縄タイムス社, 406-417. (初出1959, 『日本民俗学体系』)
- 仲原善忠(1969c): 太陽崇拜と火の神. 『仲原善忠選集 下巻』沖縄タイムス社, 418-432. (初出1959, 『日本民俗学体系』)
- 中村昌尚(1982): 久米島のグシクについて. 沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂, 127-145.
- 永山武彦, 上原政博, 大城智幸, 仲間 豊, 裁吉信(2008): 平成18年11月26日に久米島で発生した降ひょうを伴う突風. 沖縄管内気象研究会誌, 36, 63-65.
- 西 栄次郎, 仲間則智, 我那覇勝久, 城間恒彦(2006): 久米島空港と久米島灯台との風データの検証. 沖縄管内気象研究会誌, 34, 55-57.
- 長谷川 均(1984): 久米島の風と農業気象災害について. 法政大学百周年記念久米島調査委員会編『沖縄久米島の総合的研究』弘文堂, 17-30.
- 比嘉正弘, 松田博之, 山城幸浩(1989): 久米島測候所と空港出張所の風の比較.
- 保久村昌欣(2011): ウガミ考(中). 久米島自然文化センター紀要, 11, 9-14.
- 宮里勇清, 大村太郎, 金城信盛, 知念 繁(1989): 信仰. 座間味村史編集委員会『座間味村史 中巻 行事と信仰』座間味村役場, 343-430.
- 深山直子(2004): 久米島儀間村落における御嶽の神屋建立—村落社会の信仰・祭祀における伝統の再活性化と創造—. 民俗文化研究, 5, 78-92.
- 山里 清(1982): 久米島の自然. 沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂, 69-87.
- 沖縄音楽大全データベース, 大ウムイ(久米島): <http://www.nhk.or.jp/churauta/database/data/283.html>
- 沖縄音楽大全データベース, 崇びらコンナ(久米島): <http://www.nhk.or.jp/churauta/database/data/279.html>

(2014年5月20日受付)

(2014年7月9日受理)